愛知工業大学研究報告
第34号A　平成11年

ウェールズ再発見

（その２）

18世紀のウェールズとピクチャレスク・ツアー

Wales Rediscovered

- Part 2 -

Eighteenth-Century Wales and Picturesque Tour

吉賀　憲夫
YOSHIGA, Norio

Thomas Gray descended the River Wye in a pleasure boat from Ross to Chepstow in the summer of 1770. Incidentally, William Gilpin, "father of picturesque tour," made his Wye River boat trip at the same time, in the same year as Gray did it. This shows that Gray was not only one of the earliest tourists who tasted the beauty of the Wye Valley to the full but also a witness to the very first stage of picturesque tour movement.

Wales with picturesque beauty enchanted and attracted many artists. Among them were Paul Sandby, Thomas Girtin and J. M. W. Turner. They painted Welsh landscape in water-colour drawings at first, then engraved them mainly for the illustrations for Welsh guide-books. These books and pictures greatly helped English understanding of Wales which had been utterly neglected for so long.

3

18世紀中葉にイングランドの知識人の間にスコットランドやウェールズに対する知的好奇心が形成されていったのは確かに事実であったが、その背景にはこれと呼応するようにウェールズ側からも新しい動きが起きていた。これは約200年前に起きたウェールズ人のアイデンティティを求める運動からもう一歩踏み出た、より積極的な動きであった。しかしこの運動は裏を返せばイングランド文化の浸透に危機感を覚えた人々のウェールズ文化を守ろうとする試みでもあった。

18世紀半ばまではウェールズはブリテン島においてもっとも保守的な地域であり、宗教的には英国国教会が圧倒的支配力を有し、王政復古以後は強力な王党派であり、政治的にはトーリーであった。[1)] ウェールズ文化の庇護者たる有力貴族は18世紀中頃までには、そのほとんどが男子系が絶え、婚姻により非ウェールズ系の貴族にとって代わられた。ウェールズのジェントリーもウェールズ文化よりもイングランドの文化との一体観が強く、彼らの間ではウェールズ語の使用は影を潜め、グランド・ツアーの習慣から住居、庭園、装飾品、雑誌に至るまで、イングランド風の習慣や嗜好がウェールズの上層階級に浸透していった。

しかしウェールズの一般住民のほとんどがウェールズ語を使用していた。その比率は人口の80～90％であった。にもかかわらず、その言語の重要性に似合った社会的、宗教的、法律的手当ては何も講じられなかった。吟唱詩人は行き場をなくして久しく、ウェールズの旅籠で観光客のため竪琴を演奏した。優秀な竪琴奏者はロンドンで竪琴教師として身を立てた。[2] 吟唱詩人大会(eisteddfodau)も行われなかった。ウェールズ古来からの父称形式、すなわち「誰々の息子」ということを意味する"ap"という語で連結された、まるで名前自体が１つの家系図であるようなウェールズ独特の名前が廃り、ウェールズ人の間にも簡便な英語式の姓名が主流となっていった。この傾向はウェールズ人嫌いで有名であったローランド・リー主教 (Bishop Rowland Lee) がウェールズ院長官となり、公文書においてウェールズ式の名前の記述を廃止したことによりさらに強まった。[3]『ウェールズがウェールズであった時』(*When Was Wales?*)の著者グウィン・A・ウィリアムズ(Gwyn A. Williams)はその著書で、このような英語化の流れに抗した18世紀の１人のゆかいな破産したウェールズ人の署名のエピソードを紹介している。その男は次のように署名したという。

> Sion ap William ap Sion ap William ap Sion ap Dafydd ap Ithel Fychan ap Cynrig ap Robert ap Iorwerth ap Rhyrid ap Iorwerth ap Madoc ap Ednawain Bendew, called after the English fashion John Jones [4]

このような全般的な状況の中で、ウェールズ語やウェールズ人の先行きを憂うる人々が現れた。個々にウェールズの歴史や言語の研究が行われ成果を上げたが、それを継続、維持、発展させる組織がウェールズにはなかった。しかし既にイングランドでは1660年に自然科学の推進を目的とする王立協会(The Royal Society)が設立されていた。

ウェールズの利益を計るためウェールズ人により創設された団体に、1715年創立の古代ブリトン人協会 (The Society of Ancient Britons)、アングルシー出身のモリス兄弟、特に次男リチャード・モリス(Richard Morris) により1751年に設立されたカムロドリオン(the Honourable Society of Cymmrodorion)、1770年のグウィネズィギオン(Gwyneddigion)を挙げることができる。古代ブリトン人協会は、ジャコバイトの傾向の強いウェールズ人の中にあって、ハノーヴァー朝に忠誠をつくす証としてロンドン在住のウェールズ人によって結成されたものであり、またグウィネズィギオンはウェールズ愛国者団体として1770年にオワイン・マヴァール(Owain Myfyr)、英語名オーエン・ジョーンズ(Owen Jones)により創立された。

これらの団体はみなロンドンに本部を置いたが、その中で特に重要なのはカムロドリオンであった。このカムロドリオンはウェールズ語の純粋性を守り、まだ十分に知られていないウェールズの古代遺跡やウェールズの歴史、文化へ関心を向けるために、これらに関する書物の出版の保証人となったり、ウェールズ語を話さない聖職者を、ウェールズ語しか話さない教区に任命させないように圧力をかけたり、またウェールズの経済活動を助成する活動を行った。[5] この協会の会議はロンドンの酒場で行われ、大変陽気であったといわれている。創設者のリチャード・モリスの兄で、カーディガン州王室領土副管理官であったルイス・モリス(Lewis Morris)は彼の任地からその協会の運営に協力し、多大の影響を与えた。リチャードが1779年に死亡すると、この協会も力を失うが、1820年に再び甦り、また1873年に再度結成されるという道を辿る。

カムロドリオンの目的の１つにウェールズ文学の出版助成があるが、トマス・グレイが草稿の形で読んだ、エヴァン・エヴァンズの「ウェールズ詩人伝」は後カムロドリオンの支援を得て、『ウェールズ詩歌撰』として出版され、英文学史上重要な地位を占めるようになる。グレイもエヴァンズも面識はなかったが、共通の友人でメリオネスの判事で、古物研究家でもあったバーリントン(Daines Barrington)の縁で両者は互いに文学史の上に多大な貢献を成した。

リチャード・モリスの死後のカムロドリオンの衰退の中にあって、その補完的役割を果たしたのがグウィネズィギオンであった。初代の会長はオーエン・ジョーンズ（ウェールズ名オワイン・マヴァール）といい、彼はロンドンで毛皮商人として成功したウェールズ人であった。彼は若いときにリチャード・モリスと知遇を得、カムロドリオンの会員となったが、それ以前に既にウェールズ文芸の擁護と育成を目的とするグウィネズィギオンを創立してい

た。彼らウェールズ文学愛好家はロンドンの牛頭亭(the Bull's Head tavern)に集まり、1789年から北ウェールズの無名の吟唱詩人たちの集会に賞を与え始めた。これが復活した吟唱詩人大会となった。また同じ年に、グウィネズィギオンによりウェールズ最大の詩人といわれるダヴィッズ・アプ・グイリム(Dafydd ap Gwilym)の作品集が出版された。

ウェールズ文化の衰退を押し止め、積極的にウェールズというものを認識させようとウェールズ人により結成された諸団体の努力は、着実にウェールズというものをイングランド人の間に認知させていった。しかし一方でウェールズは既に産業革命の１つの重要な地域として認識されていた。この古いウェールズという地域に、消滅の危機にある古い文化と、時代の最先端を行く科学技術を伴った産業というものが同居していた。それは19世紀中葉に、より鮮明に、またより象徴的に表れるウェールズ人のジレンマを予感させるものであった。すなわち、そのジレンマとは自らのアイデンティティのために古来からのウェールズ語に固守するのか、それとも立身出世のため、また「英国社会」で不利を被らないため英語を学ぶべきかということであった。[6] しかしこの過去と未来に向けられた相反する意識のベクトルは産業革命以前のウェールズに現れた２人のウェールズ人の仕事にもう既に象徴的に表れていたのであった。

その１人は植物学、地学、考古学、博物学といったあらゆる分野に驚異的な業績を残したエドワード・ルイド(Edward Llwyd)であった。彼は植物学者や博物学者として当代一流であった。また自然科学の分野だけでなく歴史、地誌、古代学といった分野にも興味を持ち、またケルト研究や比較言語学の基礎を築いた。彼は友人のエドマンド・ギブソン(Edmund Gibson)がカムデンの『ブリタンニア』を改訂するにあたり、ウェールズ諸州に関する有益な情報を与えたり、また1697年から1701年までウェールズ、アイルランド、スコットランド、コンウォール、ブリタニーを旅行した。なおブリタニーではスパイに間違われ、投獄されたこともあった。この彼の行ったことは18世紀にウェールズが認知されていく過程で多くの人々が行ったことを先取りしている。例えば彼はウェールズを隈無く旅行した。しかし彼の成し遂げた旅行は、ウェールズというものを広く知らしめるにいたったピクチャレスクの光景を求めた18世紀の「観光旅行」的なものではなく、地誌学的、博物学的観点に立った学術的なものであった。また彼の残した旅行の覚書や調査結果等は18世紀末のガイドブックと同じように、真のウェールズ理解にとって貴重なものであった。ルイドのこの科学的なウェールズに対する研究の姿勢はウェールズの将来に向けて積極的に関与する立場を示した。この様な精神はアングルシーのモリス兄弟によるカムロドリオンに引き継がれていった。

いま１人のウェールズ人は聖職者であり、歴史家であり、文人であったテオフィラス・エヴァンズ(Theophilus Evans)であった。彼は18世紀前半のウェールズ的文化の全体的な弱体化の時期に、その著作でウェールズの輝かしい過去に光を当てた。彼の代表的な著作には、初版が1716年、第２版が1740年にウェールズ語で出版された『過去を映す鏡』(*Drych y Prif Oesoedd*)がある。これは聖職者であり、年代記編者であり、後ちセント・アサフ司教となったジェフリー・アーサー(Geoffrey Arthur)、通称モンマスのジェフリー(Geoffrey of Monmouth)の『ブリタニア列王伝』(*Historia Regum Britanniae*)の流れを汲むものとして位置づけられる。このウェールズの神話と過去の栄光を念頭に置く愛国的ウェールズ人団体としてグウィネズィギオンを位置づけることができるであろう。

さらにウェールズ古代への興味は古代研究家のヘンリー・ローランズ(Henry Rowlands)の『古代モナ島再現』(*Mona Antiqua Restaurata*)にも表れている。この古代アングルシー島に関する本は1723年ダブリンで出版されたが、ドルイドについて熱狂的な興味を呼び起こした。このドルイドへの関心はエドワード・ウィリアムズ(Edward Williams)、ウェールズ名イオロ・モルガヌッグ(Iolo Morganwg)、に引き継がれた。彼は昔のドルイド僧や吟唱詩人たちが行ったであろうという集会「ゴーセッズ(Gorsedd)」という儀式を考案し、これをロンドンのプリムローズヒルで初めて行った。このゴーセッズ は1819年、カーマーゼンでデイビッド協会が催した吟唱詩人大会の中で非常に重要な役割を担うことになる。すなわちそのゴーセッズは吟唱詩人大会の本祭に先立ち毎日開かれる吟唱詩人達の儀式として定着したのであった。このようなウェールズの輝かしい過去への憧憬と、その復活の試みはウェールズ人には誇りを与え、イングランド人にはウェールズやケルト文化へ

の興味を掻き立てたのであった。

4

文芸や学術以外で、イングランド人をウェールズにより近づけたのは、夥しい数のウェールズ旅行案内の類の出版であった。『ウェールズ史』(*A History of Wales*)の著者ジョン・デイビーズ(John Davies)によれば1770年から1815年の間に80冊におよぶ様々のウェールズに関するガイドブックが出版されたという。[7] その時代はまさに「旅行ガイドブックの時代」と呼んでもよい。それらのガイドブックを携え、多くのイングランド人が道もないウェールズの山野にやって来た。しかし人々は単にガイドブックがあったからやって来たわけではない。その背景には当時の美学的、哲学的思潮があった。フランスの思想家ジャン・ジャック・ルソーの「自然に帰れ」という号令は多くの人々を荒々しい自然の横溢するウェールズ、カンバーランド、スコットランドの丘陵地帯や山岳地帯に導いた。また美学的にはいわゆる「ピクチャレスク(絵画的)」という概念がウェールズやその他英国辺境地帯に光を投げかけたのであった。

ピクチャレスクとは芸術から現実へと向かった特異な運動であった。それはニコラ・プサン(Nicholas Poussin)やクロード・ロラン(Claude Lorrain)の描いた自然と同じ様なものが実は現実の風景の中にあることを知った人々が、そのような自然を求め訪れることにより大きなうねりとなった運動であるが、造園運動とのからみもあり、このピクチャレスク（絵画的）という概念はより多様のものとなった。

造園界においては、イエズス会宣教師の報告書の中にある中国式庭園の記述の影響もあり、従来の左右対称で幾何学的配置を基軸としたイタリア・ルネサンスの流れを汲むフランス式庭園やオランダ式庭園に代わり、英国のなだらかな地形にあわせた非対称で自然に忠実なイギリス式庭園（風景式庭園）を造る運動が始まった。美術や音楽という芸術面でフランスに遅れをとっていたため、この新しい造園運動は英国のナショナリズムを刺激し大きな運動となった。

17世紀末から、直線的で幾何学模様を基調とするフランス式庭園とは違う、庭園に不規則で奔放な美しさを求める動きがウイリアム・テムプル(William Temple)やアディソン(Joseph Addison)により提唱された。アレクサンダー・ポウプ(Alexander Pope)はそのような庭園を作った最初の一人であった。グレイの周囲にも造園論をものした友人が多かった。例えば彼の死後一切の彼の著作の出版を委ねられた友人メイソン(William Mason)は『英国式庭園』(*The English Garden*)という詩を書き、グレイの２つのピンダリック・オードを出版した大政治家ロバート・ウォルポールの四男ホレイス・ウォルポール(Horace Walpole)は1770年、『近代造園史』(*History of the Modern Taste in Gardening*)を書いた。

この新しい英国式庭園には二つの流れができた。庭園敷地の可能性(ケイパビリティ)ということを常に口にしたため、ケイパビリティ・ブラウンと渾名されたランスロット・ブラウン(Lancelot Brown)に率いられた通称ブラウン派は、イギリスの自然そのものを庭園にすることを目指した。それはややもすると既存の庭園を破壊し、もとの自然に戻すという観すらあった。ブラウンはウェールズにおいてはディネヴォール(Dynevor)家の造園に関与した。

もう一方はピクチャレスク（絵画）派と呼ばれ、彼らはそのような庭園の中にあえて崩れかかった神殿や建造物を立てることにより、新奇でまた珍奇な絵画的趣きを持った庭園造りを主張した。ピクチャレスク派の理論家としては、ウヴェデール・プライス(Uvedale Price)、リチャード・ペイン・ナイト(Richard Payne Knight)が、またその実践家としてハンフリー・レプトン(Humphry Repton)がいた。

この造園運動からも解るように、ピクチャレスクとは、左右非対称で荒々しく、不規則で変化と意外性にとみ、規模の点で小じんまりとして親しみのある風景のことを言う。これに対立するものとしてハンフリー・レプトンはビューティフルという概念を定立し、それを滑らかで、磨かれており、変化においてなだらかなものとした。またエドマンド・バーク(Edmund Burke)は崇高という概念を巨大なもの、力強いもの、荒々しいもの、危険なもの、神秘的なもの、運命的なものとした。これらピクチャレスク、ビューティフル、崇高というものは実際の絵画の中よりも現実の風景の中により溢れていたのであった。

この時期に表れた文学、美術、造園上の推移は明らかに中心から外周への意識の移行を示している。フランス式庭園に象徴される閉ざされた庭から、そ

の外へ繋がるピクチャレスクの庭（風景式庭園）、そしてさらにその外延に位置する崇高な大自然、例えばヨーロッパではスイス・アルプス、またウェールズではスノードン山といった山岳風景へと詩人、画家、造園理論家の意識は広がっていったのであり、それはそのまま新古典主義からロマン主義への移行を示していた。

ウイリアム・ギルピン(William Gilpin)は「絵画的美に関する３つのエッセー」（*Three Essays of Picturesque Beauty*)やその他の著作でピクチャレスクという概念を定着させた。彼は、『ワイ川と南ウェールズ』(1782年）、『湖水地方』(1789年)、『森の風景』(1791年)、『西イングランドとワイト島』(1798年)、『ハイランド』(1800年)という一連の挿し絵付きの「ピクチャレスク・ツアー」の著作を世に出し、専門家にではなく、一般人の間に多大な影響を与えた。彼が1782年に出版し、後に詩人ワーズワスが携帯しティンターン大修道院(Tintern Abbey)を訪れたワイ川とピクチャレルク的美についての考察はそのタイトル、*Observations on the River Wye, and several parts of South Wales, etc., relative chiefly to Picturesque Beauty made in the Summer of the Year 1770*からも分かるように1770年夏のワイ川の旅行に基づいている。

奇しくも同じ1770年夏、トマス・グレイもウースターシャー、グロースターシャー、モンマスシャー、ヘレフォードシャー、シュロプシャーを旅し、特にウェールズ・イングランド国境地帯を流れるワイ川をロス・オン・ワイ(Ross on Wye)からチェプストー(Chepstow)まで40マイルを船で下ったが、それがこの旅の圧巻であったと友人ウイリアム・メイソンに書簡で次のように語っている。

> . . .the chief grace & ornament of my journey was the river Wye, which I descended in a boat from Ross to Chepstow (near 40 miles) surrounded with ever-new delights, among which were the New-Weir (see Whateley) Tinterne-Abbey, & Persfield. I say nothing of the vale of Abergavenny, Ragland-Castle, Ludlow, . . . [8]

船による観光目的のワイ川下りは1745年にロスの教区牧師に任じられたジョン・エジャートン(John Egerton)により始められたという。[9] それから四半世紀後ワイ川の観光川下りは商業化され、グレイやギルピンも利用し、好評を博した。その観光用の船の運行は夏の間だけであり、早朝ロスを立ち、日没後にモンマスに到着した。料金は１ギニー半であった。1800年初頭のウェールズの小農場主の年収が20ポンド前後であった[10]ことを思えば、その料金はかなり高額なものであった。モンマスからチェプストウまではおよそ20マイルであり、さらに１日を要した。その料金もまた１ギニー半であった。

ロスを出発すると最初の見どころはグッドリック城(Goodrich Castle)であり、続いて景観と鉄産業が同居するニュー・ウィアー(New Weir)であった。グレイが書簡中で注釈を付けている(see Whateley)とはトマス・ウォットレイ(Thomas Whateley)が1770年出版した「近代造園に関する所見」*(Observations on Modern Gardening*)の中でのニュー・ウィアーに関する言及である。シート派の大修道院であったティンターン大修道院の廃墟は18世紀中頃から、そのロマンティックな情景で特に有名になっていた。ピアースフィールド(Piercefield / Persfield)はチェプストウを遠望できるワイ川右岸にあり、ヴァレンタイン・モリス(Valentine Morris)が300エイカーの地所を開発したものであった。川岸の崖の上に造られた庭園の通称「モリス遊歩道」は毎週火曜日と金曜日は入場が許可され、ギルピンもここで下船し、崖を上り、この庭園を訪れている。[11]

グレイは親友の医師トマス・ウォートン(Thomas Wharton)に同じ旅の様子をまた次のように述べている。

> Monmouth, a town I never heard mention'd, lies on the same river in a vale, that is the delight of my eyes, & the very seat of pleasure. The vale of Abergavenny, Ragland & Chepstow-Castles, Ludlow, . . . are the rest of my acquisitions, & no bad harvest to my thinking.[12]

アバーガベニはウェールズの有力貴族ハーバート家の本拠地の一つがあった場所であり、ラグラン城は清教徒革命時の攻城戦で有名であった。しかし彼が気にいったのはモンマスの町であった。ワイ川のほとりにあるモンマスの町はヘンリー５世の生まれたモンマス城があったが、清教徒革命で破壊されてしまった。グレイはこの町が言及されることを聞い

たことがないという。そうだとすれば、当時の一般の人々にとって、イングランド・ウェールズ国境地域は依然として未知の領域であったといえよう。

ギルピンはメイソンの庇護を受けていたため、1782年にこの『ワイ川紀行』が出版されるにあたり彼が書いた序文はこのメイソンに宛てた書簡の形をとった。その中で彼はグレイが同じ年にワイ川を訪れた事実を語り、彼が生きていれば貴重な意見を聞けたかもしれないと彼の死を悼み、"No man was a greater admirer of nature than Mr Gray, nor admired it with better taste."[13] とグレイの自然を愛する姿勢と、彼の自然を見る確かな眼を讃えている。

5

このようなピクチャレスクの運動が起きるには、それなりの下地がイギリスにはできていた。イギリス人の風景を見る眼は確かに変わりつつあった。英国風景画家の父と称されるリチャード・ウイルソン(Richard Wilson)はウェールズのペネゴエス(Penegoes)に1713年に生まれ、肖像画家として出発した。1748年には後のジョージ３世やヨーク公の子供の頃の肖像画を描き成功を収めた。この頃から彼は風景画も描き始め、1746年には《ドーヴァーの眺め》を描き、その作品は翌年版刻されて銅版画となった。1750年から1757年にかけイタリアに滞在し、ズッカレッリ(Francesco Zuccarelli)の勧めもあり、風景画へと傾倒して行き、いわゆる古典的主題による「歴史的風景画」を描くようになる。1755年には歴史的風景画の傑作の１つである《われもまたアルカディアにありき》を発表している。

帰国後彼はロイアル・アカデミー創設メンバーとなり、1760年に《ニオベ》という代表作を発表しているが、彼には有力な後援者はなかった。例えばジョージ３世はウイルソンの画風よりも軽い彼の師匠格のズッカレッリを好み、またイギリス貴族は、より荒々しい風景画を好んだ。また貴族は自分の領地を描いた風景画や狩猟画、それに肖像画を好んで描かせた。[14] このような訳でロンドンでの生計は成り立たず、故郷のウェールズへと戻り、貧困のうちに1782年、ウェールズのランベリス(Llanberis)に没した。しかし死後、ロマンティックな感情を古典的枠組みの中に収めた彼の風景画は評判となり、コンスタブル(John Constable)やラスキン(John Ruskin)の称賛するところとなった。また彼の画風を模倣するものも多く現れた。彼は《リス・ナントリーニから見たスノードン山》を始めとし、美しいウェールズの山河やロンドン近郊の風景画においてイギリス風景画に最大の貢献を果たしたのだが、そこには過去の絵画の巨匠達の権威を引き継いでおり、後の人々の眼を絵画から現実の自然へと向けるピクチャレスクの運動にも影響を与えた。

リチャード・ウイルソンの弟子トマス・ジョーンズ(Thomas Jones)はウェールズ、ラドノアシャーの生まれで近年特にその評価が高まった画家である。代表作には《ナポリの家々》(1782年)があるが、イタリアやウェールズの風景画を残している。また彼はトマス・グレイの「吟唱詩人」に基づいた同名の作品もある。

ジョン・ロバート・カズンズ(John Robert Cozens)は画家の息子としてロンドンに生まれたが、1776年８月から９月にかけスイスに滞在し、水彩で山岳風景を描き、後の画家に影響を与えた。ターナーと同じ1775年に生まれ、27歳で夭折した将来を嘱望された画家トマス・ガーティン(Thomas Girtin) はカズンズの作品の模写を通し、イギリス水彩画に新機軸をもたらしたが、1796年以降、スコットランド、北ウェールズ、イングランド各地にスケッチ旅行を行い、美しい地誌的風景画を残した。

ターナー(J. M. W. Turner)は18歳の頃から地方への写生旅行を行うようになり、そのために１日に数10キロを歩くという生活を始めるようになる。彼は1791年にブリストルを訪れた際、足を延ばし初めてワイ川の流域を探訪した。1792年から1798年の間に５回ウェールズを訪れたが、その間彼は夥しいほどの水彩スケッチを描いている。例を挙げると《ランソニー大修道院》(1794年)、《ティンターン大修道院翼廊》(1795年)、《ワイ川にかかるライヤダー・グワイ橋》(1795-96年)、《ランダィロー橋とディネヴォール城》(1796年)、《南から見たコンウィ城》(1799-1800年)がある。中でも1795年に南ウェールズを訪れた際のスケッチやメモをもとにして制作され、1797年のロイアル・アカデミー展に出品された彼の完成度の高い水彩画《グラモーガン州のイウニー修道院翼廊》に対し、当時のある批評家はそれをレンブラント(Rembrandt)の傑作に匹敵すると絶賛した。[15] ターナーは24歳の若さででロイアル・アカデミー準会員となり、27歳で正会員とな

り、その後次々と傑作を発表し、世界の絵画史に名を残すほど才能を発揮した。また彼は当時需要の多かった地誌的風景画を水彩画で描き、版画として出版し続けた。

何故ターナーが1790年代にウェールズをしばしば訪れたかという理由に関しては、当時のフランスにおける政治的社会的混乱が挙げられる。リチャード・ウイルソンでさえもイタリアで修業ができたのであるが、フランス革命後の大陸の状況は英国人の渡航を大変困難なものにしていた。しかし1802年のアミアンの和平により英仏間の渡航が自由になるとターナーは、待っていたとばかりにスイス・アルプスを訪れる。その当時の世界情勢により、ある意味では行き場所を失ったイギリス人がウェールズに殺到したとも言えるのである。確かにフランス革命後の状況はイングランド人のウェールズ再発見にはプラスに働いたと言える。

画家がウェールズ紹介に多大な貢献をしたことは明らかである。またウェールズのガイドブックに添えられた挿し絵や、ウェールズ銅版画集も多くの一般人の興味を引きつけた。博物学者であり古代研究家であり旅行家でもあったウェールズ人トマス・ペナント(Thomas Pennant)はアイルランド、マン島、スコットランド、ヨーロッパその他イングランド各地を旅し旅行記を書いているが、その中でも初版が1778年、第２版が1781年に出版された『ウェールズ紀行』(*Tour in Wales*)は彼の著作中でも最良のものであった。ウェールズ人の水彩画家モーズィーズ・グリフィス(Moses Griffith)はトマス・ペナントに雇われ、彼の旅に1769年から1790年にかけ同行した。そのときに描いた水彩風景画から銅版画が版刻され、ペナントの本に挿し絵として付けられた。この著作は大いにイングランド人の注目を集めた。彼はまたトマス・ペナントの死後、彼の息子デイビッド・ペナント(David Pennant)に雇われ、さらに1805年から1813年の間に200点に及ぶウェールズの風景画を水彩で描いた。

その他のウェールズ人画家としてはエドワード・ピュー(Edward Pugh)やヒュー・ヒューズ(Hugh Hughes)がいた。エドワード・ピューはミニュアチュールや風景画を描き、王立美術院に23の作品を出展した。彼は『カンブリア素描・北ウェールズ紀行』(*Cambria Depicta: A Tour through North Wales*)を書き、彼自身で描いた70以上に及ぶ絵を挿し絵として載せた。この本は彼の死後の1816年に出版された。一方、ヒュー・ヒューズは1820年から21年にかけウェールズをスケッチ旅行し、1823年に《カンブリアの美・60景》(*The Beauties of Cambria, sixty plates*)を出版した。彼は後、政治的にもまた宗教的にも急進的な道を歩むことになる。

ウェールズ人画家以外では、サミエル・バック(Samuel Buck)と弟ナサニエル・バック(Nathaniel Buck）が1774年に『バックの遺跡集』(*Buck's Antiquities*)を出版している。また明暗対比の効果に優れた腐蝕銅版画技法の一つであるアクアティントを英国に紹介したポール・サンドビー(Paul Sandby)は1775年出版の『南ウェールズの眺め』(*Views in South Wales*)を含むアクアティントによる３種類のウェールズ画集を出版した。これらは彼が当時芸術家のパトロンとして有名であったデンビーシャー選出の国会議員サー・ウォトキン・ウィリアムズ=ウィン(Sir Watkin Williams-Wynn)[16] の1771年の北ウェールズ旅行の随行員に加えられた縁による。すなわちポール・サンドビーがその時に描いたものがサー・ウォトキンの援助の下に出版されたのであった。これらはウェールズの風景を扱ったもっとも初期の出版物の１つであった。彼はまた英国における地誌的絵画の草分け的存在でもあった。サミュエル・プラウト(Samuel Prout)はジョン・ブリトン(John Britton)に雇われ1803年から1813年にかけて出版された『イングランドとウェールズの美』(*Beauties of England and Wales*)の挿し絵を制作し有名になった。

これらウェールズ内外の画家によるウェールズの風景画は版刻されることにより書物の挿し絵として、また画集そのものとして広く一般に流布した。19世紀になると版画の原版が銅板から、よりきめの細かい彫版が可能で、風景画の版刻に適し、大量生産の可能な鋼版に代わったことにより、より大量の版刻された風景画が印刷されるようになった。これらは画集やガイドブックの挿し絵として当時の人々の地誌的興味または「好古趣味」を刺激し、あるいは満足させ、ウェールズに対する興味を増大させていったのであった。ウェールズ人の愛国的精神もさることながら、当時の時代精神ともいえる風景に対するロマン主義的な趣向がイングランド人のウェールズ再発見に大きく寄与しているのである。

（続く）

注

1. Jeremy Black, *A History of the British Isles* (Macmillan, 1996), pp. 170-1.
2. Malcolm Andrews, *The Search for the Picturesque: Landscape Aesthetics and Tourism in Britain, 1760-1800* (Stanford, California: Stanford University Press, 1989), p. 128.
3. Gwyn A. Williams, *When Was Wales?* (London: Penguin Books, 1985), p. 118.
4. *Ibid.*, p. 119.
5. A. H. Dodd, *A Short History of Wales: Welsh Life and Customs from prehistoric times to the present day* (London : B. T. Batsford Ltd.,1977), p. 102 .
6. *Ibid.*, pp. 143- 4.
7. John Davies, *A History of Wales* (London: Penguin Books, 1994), p. 347.
8. Paget Toynbee and Leonard Whibley (ed.), *Correspondence of Thomas Gray* (3 vols., Oxford,1935 and 1971), pp.1143- 4.
9. Malcolm Andrews, *op. cit.* , p. 89.
10. A. H. Dodd, *op. cit.*, p. 107.
11. Malcolm Andrews, *op. cit.*, p. 105.
12. Paget Toynbee and Leonard Whibley, *op. cit.*,p.1142.
13. *Ibid.*, p. 1143.
14. 千足伸行,「新古典主義からロマン主義へ ----イギリス-----」,『世界美術大全集・第19巻』(小学館, 東京, 1989年), p. 222.
15. 『英国・国立ウェールズ美術館展 --イギリス風景画から印象派へ』出品目録(1986年), p. 149.
16. 父Sir Watkin Williamはウェールズの名門Wynn家の出自である母からWinnstayの地所を相続し、苗字にWynnを加え、Sir Watkin Willams-Wynnと名乗った。その長男で、肖像画家のジョシュア・レノルズ (Sir Joshua Reynolds)、音楽家のヘンデル(Handel)、俳優のデイビッド・ゲリック(David Garrick)と親交があり、またロンドンのウェールズ学校に多額の寄付をしたことでも有名なこの息子も２世として父親と同じ名を名乗った。またその長男も３世として同名を名乗る。

参考文献

The Dictionary of Welsh Biography down to 1940 (The Honourable Society of Cymmrodorion, London, 1959).

Ford, Boris. ed. *The Pelican Guide to English Literature 5 : from Blake to Byron* (Penguin Books, 1969).

Kenyon, John R."The Tourist in Wales in the Later Eighteenth and Early Nineteenth Centuries",『英国・国立ウェールズ美術館展---イギリス風景画から印象派へ』出品目録（1986年).『英国・国立ウェールズ美術館展---イギリス風景画から印象派へ』出品目録（1986年）.

『ウェールズ紀行---歴史と風景（ウェールズ国立美術館所蔵英国水彩画1675-1855）』出展目録 (岐阜美術館, 1998年).

片木篤,『イギリスのカントリーハウス』(丸善株式会社, 東京, 昭和63年).

川崎寿彦,『楽園と庭--イギリス市民社会の成立』(中央公論社 [中公新書], 東京, 昭和59年).

川崎寿彦,『森のイングランド--ロンビン・フッドからチャタレー夫人まで』(平凡社, 東京, 1987年).

千足伸行,「イギリスのロマン主義絵画」,『世界美術大全集・第20巻』(小学館, 東京, 1989年).

高橋裕子,『イギリス美術』(岩波書店 [岩波文庫], 東京, 1998年).

平田家就,『イギリス挿絵史・活版印刷の導入から現在まで』(研究社出版, 東京, 1995).

マーク・ジルアード(森静子=ヒューズ・訳)『英国のカントリーハウス』(２巻, 住まい の図書館出版局・星雲社, 東京, 1989年).

（受理　平成11年３月20日）